社会情報学部カリキュラムの変遷からみる社会情報学の展開と教育（追補版）

Development of Socio-Informatics and its Education Viewing from the Transition of Curriculum at the Faculty of Social Information (supplement edition)

高田　　洋

本論は，拙稿「社会情報学部カリキュラムの変遷からみる社会情報学の展開と教育」（『社会情報』第22巻1号，2012年）を追補改訂したものである．当初の論文は，シンポジウム「知の創生としての社会情報学」で行なわれた報告を基にしている．日本で初めての「社会情報学部」の設立を為した本学部のカリキュラム推移は，「社会情報学」の学問的専門性の始まりと発展の歩みでもある．そのため，本学部の教育と研究は，社会情報学の専門性をもった独自の学問的展開のそうした実践の場でもあった．本学部の歩みは「知の創生」としての社会情報学の専門分野化に大きな寄与があるので，そのカリキュラムの変遷がシンポジウムのテーマの一つとして選ばれたのである．学部の紀要『社会情報学』の最終記念号の特集にあたり，改めての意義があると考え掲載する．

札幌学院大学社会情報学部のカリキュラム編成の当初は既存学問分野の組み合わせという側面が強く，社会学プラス情報学という考え方から出発している．その際，社会学は問題発見，情報学は方法論的という明確な区分があった．しかし，現代社会の変化とともに，社会情報学は統合的な関係にカリキュラム上においてもなっていく．それは，情報を人間生活の基本的なものとしてとらえることにより，情報ネットワークをより能動的なコミュニケーションとしてとらえることによって行なわれた．それは，コンピュータでつながれた世界が「社会」化していく過程と符合している．しかし，最終的に意図されたコミュニケーションの側面をより強調するカリキュラム改訂は，さまざまな事情により結果的には案のみに終わり，実現することはできなかった．

1．社会情報学の確立に向けてのカリキュラム作成

25年前に札幌学院大学社会情報学部が創立されたとき，「社会情報学部」は日本で初めてであった．社会情報学は学問的歩みの端緒にあり，そのため学部カリキュラムを構成することは同時に，社会情報学の学問体系をどのように形作るかという試みでもあった．本稿の目的は，札幌学院大学社会情報学部のカリキュラムの改訂の歴史を見ることによって，社会情報学の学問的体系化の変遷をたどることである．「社会」と「情報」は，その言葉の意味から現代性と密接に関わることでもあるので，社会情報学とは何かを問うことは現代的な要請を問うことである．しかも，大学の学部として展開するからには，「いかに学生を呼ぶか」という現実的な課題をも有することになる．社会情報学研究上の体系化を，教育課程上の実践に結び付けるという作業を

Takada Hirosi　札幌学院大学社会情報学部・経済学部

当学部は先駆的に行うことになったのである．

学部創設とともに創刊された紀要『社会情報学』は，その巻頭言にある如く「投稿論文を評価しようとする努力は，社会情報学の評価体系の形成とそれを介した社会情報学の学としての形成と体系化とを促さざるを得ない」（田中，1992a）という認識を共有した．学部のカリキュラムの設定または改訂は実践としての社会情報学の体系化であったので，紀要「社会情報学」には，学部の教育内容やカリキュラム設計の理念などが節目ごとに掲載されている．したがって，本稿では，この紀要に掲載された論文をテキストとし，カリキュラムの変遷をたどることにする．その試行錯誤は，社会情報学をどのように形作っていくかという実践的な歴史を追う過程である．

2．1991 年カリキュラム ── 社会プラス情報

25 年前の 1991 年に学部が開設された当時は，全国で初めての「社会情報学部」であったということで前例がなく，しかも社会情報学の学問的体系が未だないままに教育方法を模索しなければならないという「学の形成と平行して教育を行なわなければならないという事態」（田中，1992b）であった．しかし，「社会科学の何等かの分野，……と情報学の両分野の素養を持った」（田中，1992b）人材に対する社会的要請を十分に意識していた．そのため，最初のカリキュラムはこの両分野から構成されるものとしてとらえられていた．

創設前に提出された社会情報学部「設置の趣旨」（1988 年）には次のように記載されている．社会的に要請されている人材を，「経営的見地のみならずこれを超えて広く社会およびここの社会システム内の問題を把握し，社会意識の動向を常に考慮しながら情報的に問題を処理しうる能力，いいかえれば，社会学と情報学との素養を身につけた人材」と規定し，その養成は，「社会現象を社会学の立場から捉えこれを情報学に基づいて研究し，社会学と情報学との素養の上に立って情報社会の広範な諸問題に能動的に対処することができる有為な人材を養成することを目的」とした．そのため，「情報学と社会学を統合した社会情報学の設置」を計画しているとある．

設置の趣旨の背景に認識されていた現代社会の特徴は，現代社会が「伝統的構造から現代的構造への移行」の最中であるということであった．それは，社会諸集団を社会システムとして捉えれば，その関係を覆う政治的経済的関係と情報的関係の中において，特に，コンピュータの発達に伴う「情報処理の機械化，すなわちコンピュータの一般的利用」によって情報的関係が強くなってきているという時代的特徴についての認識であった．そのため，情報の受け取りのみならず，その生産や加工を行なう能力が必要されていると強調される．社会をとらえる役割は社会学に担われており，それに情報的観点を加えるということになった．したがって，社会情報学は，「社会現象を社会学に基づいて把握し，その情報過程を情報学的に認識する視点すなわち社会の情報的視点」に立脚したアプローチと定義されることになる．

つまり，学部開設時のカリキュラムの構成は「社会学＋情報学」というアプローチがとられることになる．「科目の構成は現代社会を社会学と情報学の双方から捉えることから始まる」（田中，1992b）．社会を捉える問題発見としての社会学系科目と，方法としての情報学系科目という位置づけである．社会学系科目の基礎科目には，社会学概論，社会学史，社会心理学，情報社会学が置かれ，情報学系科目には，情報学概論，電子工学概論，ハードウェア論，ソフトウェア論が置かれている．また，社会学系と情報学系の「橋渡し」として，社会情報システム論，社会組織論，社会

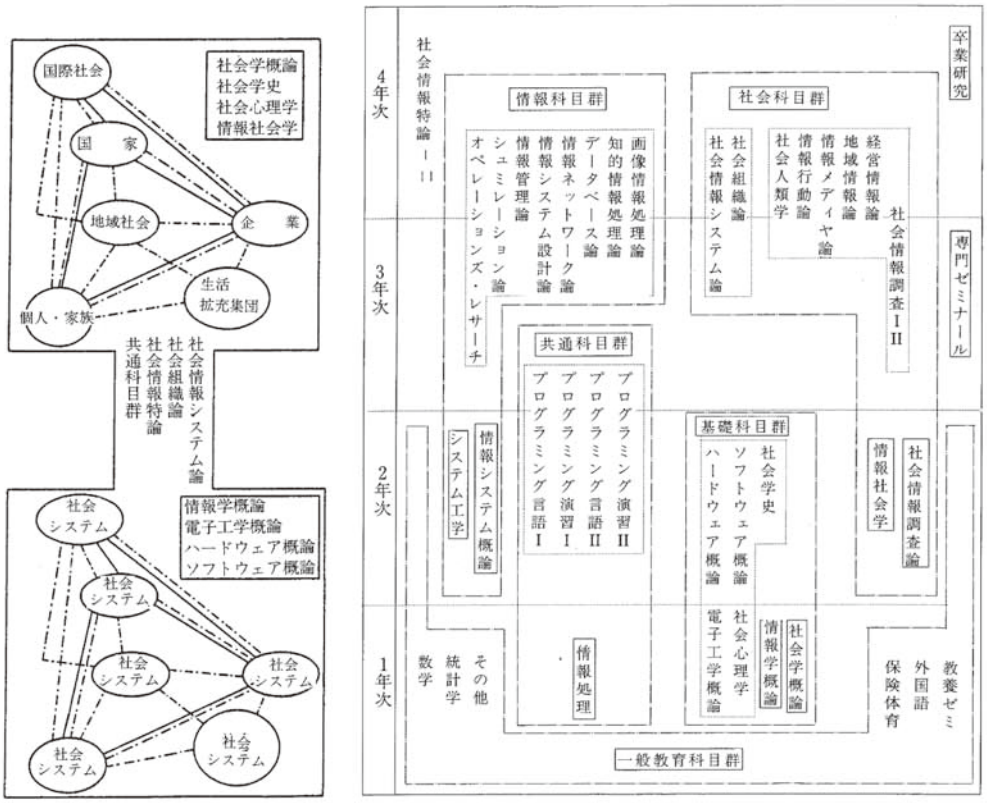

図１　1991 年社会情報学部科目構成（田中，1992b より）

情報特論が，さらに，「いずれの分野とも等距離の関係を持つ科目」として情報処理とプログラム言語科目が置かれている．

実際には，社会を捉えるという観点からは，社会学だけではなく他の諸社会科学が想定されており，社会人類学，社会心理学，経営学などが取り入られている．一方の情報学系にはほかにもシステム設計，シミュレーション，オペレーションズ・リサーチなどの分析的科目が置かれており，情報処理・プログラム言語の基礎から分析的な応用までの体系が整われている．情報学系の体系的な科目構成に対し，社会学系は基礎から応用への体系というよりは領域ごとの構成になっているという特徴がある．図１に科目の関係の見取り図と履修科目を示す（いずれも田中，1992b より）．

このカリキュラムが想定する履修モデルとしては，社会情報利用型とシステム開発型の２つを挙げている．また，研究領域では，情報学の研究領域の拡大，新しい情報過程の研究，データの情報処理，情報学と社会学の協力という４つが期待されていた．体系だった情報学科目群を中心に置き，それを社会に応用する術または応用可能性としての既存社会科学群が期待されていたという状態であったと言える．企業や実務上の仕事においての情報学的な知識が必要とされていることは十分に自覚されており，それが情報学の体系立った科目に反映されている．だが，その技術ないし知識が学問的に社会の上で成り立ち得るかについてはいまだ模索段階であったことが窺える科目構成になっている．この段階では，情報学的な技術が社会科学の諸領域においてどのように学問上に位置づけられるかについての社会理論上の問題に加えて，その技術が各社会科学諸領域において学問方法論的にど

のように役に立つかという問題もいまだ模索段階にあった．

3．1996 年カリキュラム ── 実践の場としての社会調査の強調

社会科学諸領域において情報学的ツールがその分析方法論上重要になってくるにつれ，その成果を社会情報学に取り入れたいという社会的要請も強くなってくる．その要請にこたえるべく，カリキュラムにおいては「社会調査」の重要性が高まっていくことになる．

4 年間の実績を踏まえた 1996 年のカリキュラム改訂においては，前カリキュラムの基本理念は踏襲しつつ,「学生の実状，社会からの要請あるいは社会情報学部・学科に関連する他大学の情勢等を総合的に考慮しつつ，より充実した内容に改訂」（斉藤，1996）することとなった．次のような教育上の観点からカリキュラムが小規模ながら修正される．つまり,学生の理解をさらに深めるような教育，より社会的要請に沿った学生の育成，学部一貫教育,少人数教育の促進という観点である．これは「方法的な改訂」（斉藤，1996）に留まる．TA（ティーチングアシスタント，主に院生が担う），SA（スチューデントアシスタント，主に同科目を履修した先輩が担う）が導入され，教える人を多様に増やすことにより少人数教育に対応し，履修モデルに「マルチメディア／ネットワーク応用型」が追加されることにより道具的な側面をも強調する．科目的には，社会学系と情報学系のバランスが配慮された.図 2 にこのカリキュラムを示す．

この小改訂は主に教育上の観点から行われたが次のような変更があった．社会情報調査論と社会情報調査実習Ⅰ・Ⅱを社会情報調査論と社会情報調査実習に整理するとともに少人数実習とする．１年次の基礎ゼミナールを発足させる．情報処理を AB の 2 つにわけ少人数化する．社会組織論と経営情報論がなくなり，コミュニケーション論と社会情報システム論が加わる．情報管理論，情報システム設計論，オペレーションズ・リサーチがなくなる．情報ネットワーク論を情報ネットワーク・マルチメディア論に，画像情報処理論をコンピュータグラフィックス論に，知的情報処理論を知的情報システム論に変更することにより，システムとメディアを強調する．教育的な要請から行われたこの改訂は，結果的に分析方法論上における情報ツールの重要性の高まりを反映することとなった．ここに至って，情報ツールを用いて社会にアプローチするという態度が徐々に明確になっていく．

1998 年には 3 年次の社会情報調査実習が必修化される．「社会科学の理論に依拠して様々な社会現象を把握する力」（小内，1998）を養うために，フィールドワークを経験させるとともに,実践的に社会系と情報系との「クロス」を体験させることを重視する．社会における社会調査の必要性の高まりを意識し，社会情報学の具体的な実践の場として調査を意識的に設定する．1 グループ 20 人程度の少人数実習で，課題・仮説の検討から結果の発表までの一連のプロセスを学習する．履修要綱には,「現代社会において生起する問題を解決するために，社会科学の理論に依拠して様々な社会現象を把握し，それを情報科学の理論と技術を利用して取扱いうるような素養を持った人材」を育成することを教育の目標として掲げる．情報技術の利用が教育により取り入れることにより，社会と情報の融合が深まっていくこととなる．教育上の実践が学問的融合を促すことになった．教育と学問の結びつきがここに現出していく．

4．2001 年カリキュラム ── コミュニケーションとしての社会情報学

2001 年のカリキュラムの改訂は，表面的には，少子化と全入現象による学生の変化への対応を意図していた．それに対応した改訂の

札幌学院大学社会情報学科専門課程カリキュラム全体図
（この図は学年進行にともない下から上に向かって履修するように表示してある）

◎	卒業研究　4　注2			
◎	社会情報学専門ゼミナール　3			
	社会情報学特論B　3,4			
	社会情報学特論A　3,4			
〔3〕	社会情報システム論　3,4	〔3〕		
	情報メディア論　3,4		コンピュータグラフィックス論　3,4	
	コミュニケーション論　2,3,4		知的情報システム論　3,4	
	地域情報論　3,4		シミュレーション論　3,4	
	情報行動論　2,3,4		情報ネットワーク・マルチメディア論　2,3,4	
	社会人類学　3,4		データベース論　2,3,4	
◎	社会情報調査実習　注1　3			
◎	社会情報調査論　2			
{1}	社会学史　2,3	{1}	ソフトウェア概論　1,2	
	社会心理学　1,2,3		ハードウェア概論　1,2	
◎	システム工学　2			
◎	情報社会学　2			
◎	社会情報学概論B　1			
◎	社会情報学概論A　1			
{1}	プログラミングB（2コマ連続，8単位）　注4　2,3			
	プログラミングA（2コマ連続，8単位）　注4　2,3			
{1}	情報数学B　1,2			
	情報数学A　1			
◎	情報処理B（2コマ連続，後期集中）　注3　1			
◎	情報処理A（2コマ連続，前期集中）　注3　1			
◎	社会情報学基礎ゼミナール　1			

◎は指定必修，{1}〔3〕は選択必修．数値は最低履修科目数．
注1：社会系専任教員，社会学系の非常勤講師，実習指導員，学生アシスタント（＝在校生＋当学部卒業の科目等履修生）等．
注2：科目名の右の半角数字は配当学年．
注3：情報系専任教員＋実習指導員＋学生アシスタント．
注4：情報系専任教員＋実習指導員＋学生アシスタント．
注5：特に表示している科目以外は1コマ90分4単位．

図2　1996年カリキュラム（斉藤，1998より）

「哲学」は，コミュニケーションとしての社会情報を前面にうち出す．この哲学をもとにカリキュラムを構成するという方法がとられた．これまでの「『情報』に対する認識は，……情報処理技術の観点に偏りがちである．これに対し，『社会情報』は，……人間の活動に本質的なものとして情報をとらえ，その意義，役割，影響を明らかにしようとするものであ

る」とされた．社会情報の定義の本質的な変更が行なわれている．人間や社会において「情報」が本質的であるとすることにより，社会現象を把握するための情報学的アプローチという社会情報学の定義から，社会現象そのものが情報過程であるという大きなパラダイムの変更が行なわれる．社会現象は情報過程そのものであるととらえれば，「社会情報学」のやるべきことはその伝達のあり方や伝達の意味をとらえることである．伝達のあり方や意味は「コミュニケーション」と呼ばれる．であるから，コミュニケーションの中での社会的文脈と，情報処理技術の役割が強調されることになる．「社会情報は社会生活のさまざまな局面で作り出され，コミュニケーションされる．したがって，情報の収集，生産，蓄積，アクセス，伝達を社会的文脈でとらえる必要がある．」（大國ら，2001 年）「社会情報はコミュニケーションなくして意義を持ち得ないから，現在最も有効な方法である情報処理技術の役割はきわめて大きいといわなければならない」（同）．コミュニケーションとしての社会情報という新しい定義により，社会情報学は応用範囲を広げ，より本質的なものとして展開されることとなった．

そのような哲学をもとに立てられたカリキュラムの教育目標と人材育成は，第一に，社会・情報に対するトータルな視点を強調する．人，組織，社会に対する歴史的，全般的理解，その中で果たす情報の特質と社会的役割，人，組織，社会における情報のコミュニケーションの 3 つを具体的に敷延することとした．第二に，情報の収集，分析，処理に対する方法，スキルを涵養する．調査等における情報の扱い方，収集方法，情報，データ分析方法とその社会的評価法，情報，データの蓄積，伝達／コミュニケーション方法の 3 つを展開することによりそれに答える．情報をコンピュータ技術の中のみに矮小することなく，より広い情報システムにおける知識と能力を教育するようにカリキュラムが改訂された．

カリキュラムの編成方針は，ゼミナールを中心に，全体的視点を涵養し，スキルの修得で補完するように構成されている．「全体的視点」が強調されていく．社会に関する認識を深める科目としての現代社会論群，情報を社会的視野から理解する科目としての社会情報学群に，従来の科目は再構成され，それに，組織，社会をシステムとしてとらえる情報システム群が加わる．スキルは，調査方法，データの収集，分析の方法としてのフィールドワーク，データサイエンス群，データの蓄積を学ぶデータベース，マルチメディア群，情報のコミュニケーションを扱う情報ネットワークシステム群が設定された．

この改訂の際に示されたカリキュラムの骨格，科目群の積み上げ，カリキュラムの全体像を図 3 に示す．より広く社会情報学をとらえることにより，履修モデルが，メディアとコミュニケーション指向，社会のデータ解析指向，フィールドワーカ指向，人間の情報処理分析指向，システム管理指向，システムエンジニア指向の 6 つになった．基礎としてのリテラシーの強調，学部認定の社会調査士カリキュラム，必修科目の減少と選択科目の増加，演習，実習の重視により，実践的な場を設定しながらより体系的に「社会情報学」を学ぶようにカリキュラムが構成された．ここに至り，既存学部分野の組み合わせを超えた社会情報学独自の体系が姿を現すこととなった．

5．2006 年カリキュラム案 ── 実現されなかった「社会」としての社会情報学

2006 年にはより変化した社会に対する対応すべく「サイバー社会」を意識的にカリキュラム上に位置づける試案が提出されている．ネット・ゲーム，ブログ，CMS，SNS 等のサ

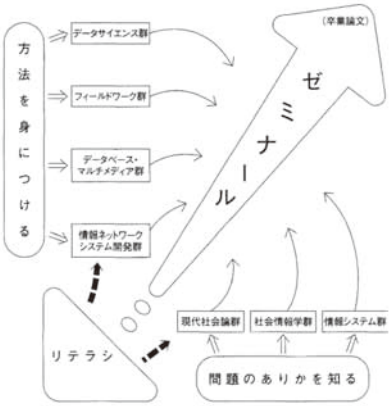

図1　カリキュラムの骨格

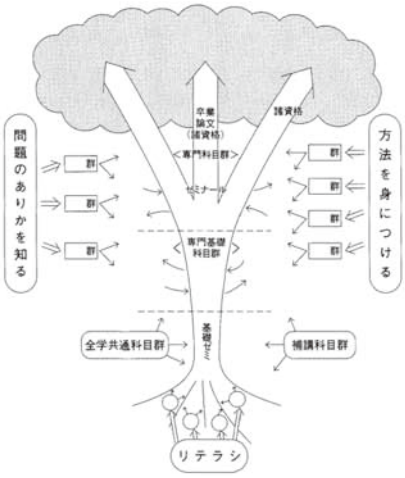

図2　科目群の積上げ

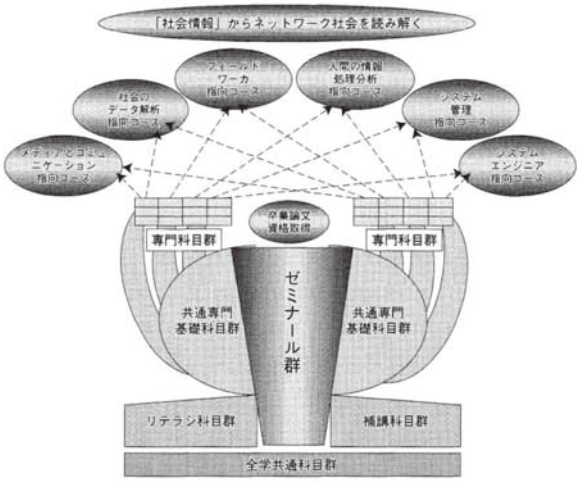

図3　カリキュラムの全体像

図3　2001年カリキュラム（大國ら，2001より）

イバー社会を，情報と社会に横断する対象領域として加えるということを意図し，リサーチ，デザイン，システムの3領域にて，カリキュラムを整理している(図4)．コンピュータ・コミュニケーションがもたらした社会をサイバー社会と積極的にとらえ直し，その社会を分析の対象にも加えるという野心的な試みである．この試案は，社会情報学部の構成理念に次のとらえ方を可能とさせた．「第1に，サイバー社会を『社会』ととらえると共に，現実の社会の関係を含んだ展開が可能」となる．「第2に，サイバー社会に固有の社会情報現象を改めて社会情報学の対象とすることができる．「第3に，サイバー社会現象には新しい社会経済活動等が研究対象として含まれる」ことになる(大國ら，2006年)．もはや無視できないインターネット上のコミュニケーションをも社会として，社会情報学の文脈にとらえようとした試みであったが，実現には至っていない．

こうした「サイバー社会」の実社会化は当初は想像上のものとしてしかとらえられていない側面があったが，今日において振り返ってみると，現実は想像以上に実社会に密接に関わってきているといえる．コンピュータを介したコミュニケーションが今日においては

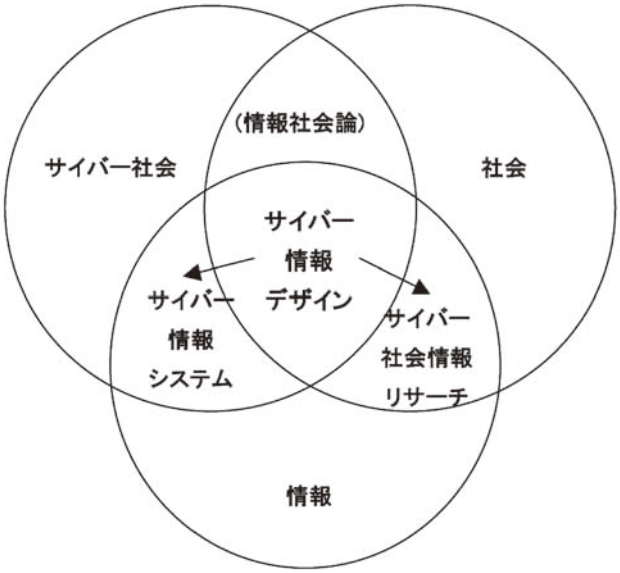

図4　2006年カリキュラム試案（大國ら，2006より）

日常的な社会を構成していることはもはや疑いようがない．こうした面からみると，社会情報学的な観点はますます重要になってきているともいえるが，それに対応することを意図した新カリキュラムが実現されなかったのは残念なことである．

6．社会情報学の体系化と教育

札幌学院大学社会情報学部のカリキュラム編成の最初は，「社会情報学」が新しい学問体系と未知の評価システムであることからの探索性があった．当初は既存学問分野の組み合わせという側面が強く，社会学＋情報学という考え方から出発している．その際，社会学は問題発見，情報学は方法論的という明確な区分があった．技術を主とした情報学の体系的な教育内容を軸とし，その周りを既存社会科学が囲むようなカリキュラム構成である．この段階では，情報学的な技術の社会科学諸領域における社会理論上位置づけの問題と，その技術が方法論的にどのように役に立つかという問題がまだ開拓領域であった．

現代社会からの要請あるいは社会の進展とともに，それに応えるように，社会学と情報学は統合的な関係にカリキュラム上においてもなっていく．そのことは，最初，教育方法論上の必要性から再構成が迫られることとなる．

情報技術が日常化すると共に社会情報学は情報概念の再定式化が要請される．それに応え，社会情報学部は，情報を人間生活の欠かざるを得ないものとしてとらえることにより，情報ネットワークを，組織，集団間の単なるつながりから，より能動的なコミュニケーションとしてとらえるようにした．社会情報学を，各組織（システム）間をつなぐ技術としてただとらえるよりも，よりコミュニケーションツールとしての側面を強調するようにカリキュラムは改訂されてきた．分離されていた情報が，社会となり，さらに，情報の中が社会化されていく．そのようなコンピュータでつながれた世界が「社会」化していく過程とともに社会情報学は歩んできた．札幌学院大学社会情報学部のカリキュラムはその学問的な体系化に挑むことにより，研究上の創造性を教育に活かすという理想的な大

学教育を担うことになったのである．

参考文献

大國充彦・小内純子・佐藤和洋・千葉正喜・長田博泰(2001)「社会情報学部新カリキュラムについて　── カリキュラム検討委員会最終答申 ──」『社会情報』Vol.10，No.2：125-154.

大國充彦・佐藤和洋・千葉正喜・長田博泰（2006）「詳説社会情報学部再編案」『社会情報』Vol.16，No.1：121-1.

小内純子(1998)「社会情報学教育と社会調査：社会情報調査実習の必修化を目前にして」『社会情報』Vol.7，No.2：21-27.

斉藤たつき(1996)「社会情報学教育の確立にむけて：札幌学院大学社会情報学部の新カリキュラムのめざすもの」『社会情報』Vol.5，No.2：111-118.

斉藤たつき(1998)「社会情報学教育の展望：札幌学院大学社会情報学科カリキュラムの改訂と将来の課題」『社会情報』Vol.7，No.2：1-4.

高田　洋(2012)「社会情報学部カリキュラムの変遷からみる社会情報学の展開と教育」『社会情報』Vol.22，No.1：13-20.

田中　一(1992)「社会情報学の門出」『社会情報』Vol.1，No.1：1.

田中　一(1992)「社会情報学部の教育」『社会情報』Vol.1，No.1：109-121.